

平安中期のテアリ文における 他動詞構文について

神 永 正 史

要 旨

平安中期におけるアスペクト形式としての「てあり」（以下テアリとする）が、どのような意味・機能を表したかを、テアリに上接する動詞の意味特性からみていく。テア리를アスペクト表現形式として用いるテアリ構文（以下テアリ文と略す）の意味は、テアリに上接する動詞によって異なってくるが、大きく分けて、自動詞と他動詞の一部が上接する「動作・変化主体について述べている文」と、他動詞のみが上接する「動作客体について述べている文」に分けられる。例文数からみると、前者のほうが後者より圧倒的に多い。他動詞において、この2文のどちらを構成するかの分類の基準は、(再帰的用法のものは除いて) 上接他動詞の限界性の有無による。「動作客体について述べている文」は、さらに、テアリに意志や使役の助動詞が下接するかどうかにより、客観的動作結果を表すものと、動作結果の意志的維持を表すものに分けられる。例文数からみると、前者のほうが後者より幾分多い。

1. はじめに

アスペクトの助動詞「たり」（以下ではタリとする）の原形とみなされるテアリは、数においてはタリに対して甚だしく劣勢ではあるが、タリ同様アスペクト表現として中古の作品に見出される形式である。本稿は、上代から現代まで連続してみられるアスペクト形式であるテア리를、時代を平安中期に限定し、この表現形式が表す意味・機能をみていこうとするものである。なお、テアリについては、同じアスペクト表現型式のタリとの異同が注目される場所であるが、その件については本文中では特に触れず、適宜注などで述べる。

本稿では資料として仮名散文の作品源氏物語、うつほ物語、落窪物語（以上作り物語）、枕草子（随筆）、栄花物語（歴史物語）の5作品を取り上げた。テキストとして『新編日本古典文学全集』（小学館）を用い、これら5作品の本文・校訂については全てこの全集に依拠した。また解釈、現代語訳については前書ならびに『日本古典文学大系』および『新日本古典文学大系』（岩波書店）を主に参考にした。例文として扱うテアリ文はすべて「動詞+テアリ」の形のものとし、そのため5作品に現れたテアリ文の197例中、

動詞十助動詞「る」「らる」「す」「さす」、および動詞十敬語補助動詞「たてまつる」「きこゆ」にテアリが下接する 20 例は、態（ヴォイス）の変更および意味の不明確化などを避けるため扱わないので、本稿で扱う例文数は 177 となる¹。

論の展開としては、最初に動詞類型別にテアリ文を概観する。そのため、まず、論者のテアリ文上接動詞の分類基準を述べ、それに従って動詞を類型化し、その類型毎にテアリ文をみていく。次に他動詞のうち限界性を有する動詞が上接するテアリ文を形・意味の上から幾つかのタイプに分け、タイプ毎に動作主体の扱いについてみていく。これらの作業を通して、平安中期テアリ文における、限界性の有無による他動詞構文の異なり、および限界性他動詞構文の意味特徴をみていく。最後に本論をまとめる。

2. テアリ文概観

2.1 テアリ上接動詞の分類基準

テアリは動作・変化の結果状態、継続等を表す²。テアリは上接動詞が動作を示すものか、変化を示すものか、目的語をとるか、とらないかなどにより意味・機能に異なりが生ずるが、更に目的語をとる動詞は、とらない動詞と異なり、限界性 (telicity) の有無によって、状態表示の対象が動作の主体か客体かに変わる。このようなテアリ文の相互の異なりを明確化するため、以下のように動詞を分類する。

まず、目的語をとるかとらないかを区別するため自動詞と他動詞に分ける。自動詞は動作を示すもの（これを類型Ⅰとする。以下同じ）と変化を示すものに分ける。変化を示す自動詞を、動作による変化か、状態の変化かという観点から、主語にあたる有情物の動作による動作主自身の変化を示すもの（Ⅱ）と、主語にあたる有情・非情物自体の状態の変化を示すもの（Ⅲ）に分ける。次に他動詞であるが、テアリ文は上接する他動詞の限界性の有無 (telic or atelic) によって意味的に大きく異なるので、限界性のないもの（Ⅳ）と限界性のあるもの（Ⅴ）に分ける。

2.2 各類型に属する動詞

まず類型Ⅰにあたる動作を示す自動詞であるが³、これに属する動詞は意志的動作（「おこなふ」「出で走る」など）や無意志的動作（「笑ふ」「慰む」など）、および動的 (dynamic) な展開が見られない状態性動詞（「ながらふ」「生く」など）などが含まれる（計 38 例）

- (1) 惟成^{これしげ}入道は、聖よりもけにめでたくおこなひてあり。花山院^{くわさん}は御受戒、この冬とぞ思しめしける。
(栄 巻 2)

次に類型Ⅱにあたる変化自動詞のうち動作によるものであるが、これに属する動詞は、主語にあたる有情物自身の動作行為（以下行為と略す）による動作主体（＝動作主）の変化を示すもの（「うち群る」「出す」など）が含まれる（計 21 例）。

- (2) 殿の御前どもは、側の方に忍びやかにうち群れてあるに、院の御供の人々忍び
させたまへど、いと多くぞさぶらふ。 (栄 巻13)

同じ変化自動詞であるが、類型③に属する動詞は、主語にあたる有情・非情物自体の状態の変化を示すもので、外見的な変化（「落ちあぶる」「古る」など）や、内面的な変化（「懸想だつ」「気色ばむ」など）、および相対的な変化（「勝る」「すぐる」など）などが含まれる（計51例）。

- (3) 「あさましうて失ひはべりぬと思ひたまへし人、世に落ちあぶれてあるやうに、
人のまねびはべりしかな。・・」 (源 手習)

次に類型④にあたる限界性のない他動詞であるが、これに属する動詞は発話に関するもの（「言ふ」「語らふ」など）や、動的な展開がみられない心理動詞（「思ふ」「思ほす」など）が含まれる（計32例）。「言ふ」類（(4)）と「思ふ」類（(5)）の2例を示す。

- (4) 笑はせたまひて、「さらば、ただ心にまかせ。われらはよめとも言はじ」とのたまはすれば、「いと心やすくなりはべりぬ。今は歌のこと思ひかけじ」など言ひてあるころ、庚申せさせたまふとて、内の大臣殿、いみじう心まうけさせさせたまへり。 (枕 95段)
- (5) おのづから事ひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかと思し疑ひてなんありける。 (源 桐壺)

最後は類型⑤にあたる限界性を有する他動詞である。これに属する動詞は動作対象がその動作主の行為により何らかの変化を被るもの（「封ず」「隠す」など）や生産・出現（「造る」「書く」など）などを意味するものが含まれる（計35例）。

- (6) 急ぎ出て見れば、おとどの御もとにある御文、いとよく封じてあり。
(う 国譲下)

2.3 テアリ文概観のまとめ

(1) から (6) までの例文を通して各類型のテアリ文をみてきたが、このうち (1)～(5) は「～テアリ」がテアリ文の主語にあたる有情・非情物の状態について述べているものであることがわかる。具体的には (1) (2) (4) (5) は主語にあたる動作の主体（惟成入道 ((1))、殿の御前ども ((2))、作者 ((4))、春宮の祖父大臣など ((5))）の動作結果・継続の状態について述べている。このような「動作主体について述べているテアリ文」（以下「動作主体のテアリ文」とする）で用いられているテアリを以下では「動

作主体のテアリ」と呼ぶことにする。(3) では主語に当たる変化の主体 (あさましうて失ひはべりぬと思ひたまへし人) の変化結果状態について述べている。このような文のテアリを以下では「変化主体のテアリ」と呼ぶことにする。まとめていえば類型Ⅳ~Ⅵの動詞が上接するテアリ文は動作や変化の主体 (の状態) について述べているといえる。つまりこのようなテアリは「動作・変化主体について述べているテアリ」(以下では「動作・変化主体のテアリ」とする) としてまとめることができる。これに反し (6) のテアリは動作 (封ず) の主体の動作結果・継続の状態について述べているとは思えず、また、それ以前に、この文では動作主体が誰であるか特定できていない。これらのことから、類型Ⅴのテアリ文の表す内容は、他の種類のテアリ文とは異なっているものと思える。以下ではこの類型Ⅴのテアリ文について詳しくみていく。

3. 限界性を有する他動詞の分類

3.1 限界性を有する動詞の細分類

類型Ⅴに属する限界性を有する他動詞はその意味する内容によって3つ (①~③) に分類される。以下分類毎に各々2つの例文を添えて示す。

- ① 限界性のある他動詞のうち、動作の対象 (=客体 (以下では「動作客体」とする)) がその動作主の行為により変化 (位置変化、状態変化等) を被る動詞: 以下のものである (計19例)。

「乗す」「隠す」「据う」「付く」「刺す」「結ひあはす」「鎖す」「見捨つ」「籠む」「とりまず」「(とりませなど) す」「もてなす」(3例) 「重ね」「御文す」「連る」(2例) 「封ず」

(7) また、御迎への出車^{いだしぐるま}ども十二、本所^{ほんぢよ}の人々乗せてなんありける。(源 宿木)

(8) さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、「答へきこえで、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。(源 末摘花)

(7) は動作客体が位置変化を被っている例である。本邸から出車に乗せられた女房たち (動作客体) について述べている。(8) は動作客体が状態変化を被る例である。格子 (動作客体) を鎖じられた状態にせよ (=鎖じておいてください) の意味である。

- ② 限界性のある他動詞のうち、動作主の行為によりなんらかの「(非情・有情のもの) が生産・出現される動詞: 以下のものである (計9例)。

「造る」「しつらふ」「用意す」「よそふ」「彫り透かす」「書きしるす」「書く」「迎へ取る」「尋ね取る」

(9) 民部卿の御方^みになむ、新しき糸毛の車、造りてあめるを、(う 藏開中)

- (10) この人は・・中略・・母君も亡せたまひて後、かの殿には疎うとくなり、この宮には尋ね取りてあらせたまふなりけり。(源 権本)

(9) は動作客体が生産される例である。新しく造られた糸毛の車(動作客体)について述べている。(10) は動作客体が出現される動詞の例である。「尋ね取る」という獲得行為により動作客体(この人)が出現していることを述べている。

以上のように、限界性を有する他動詞のうち、類型Ⅴの①②のグループの動詞が上接するテアリ文は、動作客体の変化結果やその生産・出現について述べており、このような文のテアリの述部としての役割は、まとめれば「動作客体について述べる」といえるであろう。このような「動作客体について述べているテアリ文」(以下では「動作客体のテアリ文」とする)で用いられているテア리를、「動作主体のテアリ」に対するものとして「動作客体のテアリ」と呼ぶことにする。

- ③ 限界性のある他動詞のうち、身体的動作や自身に対する行為など再帰的なもので、結果が動作客体に残存しない動詞：以下のものである(計7例)。

「(耳を)ふたぐ」「着る」(3例)「(身を)捨つ」「(罪)かくす」「(むかへ火)つくる」⁴⁾

- (11) 「いみじう、かたはらいたき事はせさせつぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その布一つ取らせて、とくやりてよ」(枕 83段)

- (12) 世の中の愛あひしきものは、親をこそいへ、そが上も知らず、さてもありぬべかりしをも捨ててあるは、いかなるにかあらむ、(う 国譲上)

(11) は身体的動作を示す動詞の例であり、「耳をふさぐ」という動作主体自身の動作について述べている。(12) は動作主体自身に対する行為を示す動作の例であり、動作主体(さてもありぬべかりし(身))に帰ってくる動作行為について述べている。③のグループに含まれる動詞を自・他で分ければ他動詞ではあるが、内容は動作主体に関する自動詞的なものである。このグループのテアリ文は①②と異なり、動作主体について述べており、この点では限界性他動詞+テアリという形をとってはいるが、内容的には動詞の類型ⅠⅡⅢをとるテアリ文のテアリと同じものである。ゆえにこれら③のグループの動詞が上接するテアリは「動作主体のテアリ」であるといえる。

3.2 動作客体のテアリ文の意味

3.2.1 動作主が後退、背景化したテアリ文

以上述べてきたように、動詞の類型Ⅴにあたる限界性を有する他動詞が上接したテアリには「動作客体のテアリ」(①②の動詞グループが上接するもの)と「動作主体のテアリ」(③の動詞グループが上接するもの)の2種類があることがわかった。以下では①②の動詞グループによって構成される動作客体のテア리를含む文、つまり「動作客体の

テアリ文」の表現する意味についてみていく。

次の4例は動作客体のテアリ文のうちテアリに意志、使役等の助動詞の接続していないものである。

- (13) ただ、いとすくよかに言^{ことず}少なにてなほなほしきなどぞ、わざともなけれど、
物にとりまぜなどしてもあるを、 (源 宿木)
- (14) かの須磨のころほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるはことに結^{むす}ひあはせてぞありける。みづからしおきたまひけることなれど、．． (源 幻)
- (15) すべてかしこに仕うまつるべき女、かたちども、仁寿殿には候ふべき用^{もち}意してあり。 (う 内侍のかみ)
- (16) この殿のを錫^{ろうふ}の虫はみなどしたるに、文^{あやけづ}削り出だしなどしたるに、唐草、鳥など彫^うり透かしてあるに入れて、 (う 内侍のかみ)

(13) では物に「とりまぜなどしてもある」(何かと一緒にしてあったりする)と動作客体(中の君に宛てた手紙)の結果状態を述べている。ここでは「物にとりまぜなどす」という動作の主は中の君であることは明らかであるが、そのことには文中でふれず、動作主体は文の表面からは後退している。(14)も同様で「ことに結ひあはせてぞあり」(特にまとめて結わえてある)と動作客体(かの御手(=紫の上から院(源氏)に送られた手紙))の結果状態を述べている。ここでは「結ひあわす」という動作の主は、手紙が院に送られたものなので、院である可能性があるが、そのことには文中でふれず(次に続く文で動作主が誰かを明らかにしているが)、動作主体は文の表面からは後退している。(15)では「用意してあり」という動作客体(すべてかしこに仕うまつるべき女(=かたちども))の結果状態を述べている。しかし(13)(14)と違い(15)では「用意す」という動作の主は特定化できず、動作主体は文から背景化している。(16)では「彫り透かしてあり」という動作客体(唐草、鳥など)の結果状態を述べている。しかし(13)(14)と違い(15)同様(16)でも「彫り透かす」という動作の主は特定化できず、動作主体は文から背景化している。このように類型⑤の①②の動詞が上接するテアリ文のうち次の3.2.2で述べる「テアリ+意志、使役の助動詞」の形のテアリ文以外のもの(計16例)は、意志・使役等の助動詞が付いていない分、テアリ文全体の描写が中立・客観的なものとなり、且つ動作主体が文からは後退・背景化したものとなっている。それゆえ意味は動作客体の客観的な結果状態(一をーしてある)を表す。これらのテアリ文の動作客体にあたる名詞は非情物が14で有情物(人)は2つであるが、その2つは一般的な人々(「本所の人々」「かしこに仕うまつるべき女(ども)」)を指し、特定の個人ではない。

3.2.2 動作による客体結果の意志的維持を表すテアリ文

次の4例は動作客体のテアリ文のうちテアリに意志、使役等の助動詞の接続しているものである。

- (17) しばし、ここに隠してあらん、と思ふも、見ずはさうごうしかるべくあはれに
おぼえたまへば、(源 東屋)
- (18) 「・・異事は知らず、世にあらんかぎりは、何ごとをか見捨ててはあらんと思
ふに、心憂く。・・」(栄 巻10)
- (19) ここにも、一中略一 をさをさ劣らぬ人も、類にふれて迎へ取りてあらすれ
ど、こよなく衰へたる宮仕人などの・・(源 滯標)
- (20) 家ひろく清げにて、わが親族はさらなり、うち語らひなどする人も、宮仕へ人
をかたがたにすゑてこそあらせまほしけれ。(枕 284段)

(17) では「隠してあり」に意志の助動詞「む」が付き、「(女君(浮舟)を)しばらくここに隠しておこう」という意味となる。(18) では「見捨ててあり」に助動詞「む」が付き「何ごととも見捨てるつもりはない」という意味になる。(19) は「迎え取りてあり」に使役の助動詞「す」が付き、「縁故をたよって呼び迎えている」となる。(20) では「す(据)ゑてこそあり」に助動詞「す」が付き、その上さらに願望の助動詞「まほし」が付くことにより、「[宮仕えしている人を部屋部屋に置いておきたいものだ]の意味となる。このようにテアリに意志、使役の助動詞がつくことにより、「～テアリ」は「一を～しておく」という動作による客体結果の意志的維持というものを表すものとなる。このようなテアリに意志、使役の接続する例は、他に「書きしるしてあらん」「もてなしてあらせよや」などで合計12例ある。これらのテアリ文の動作客体に当たる名詞は、非情物が5で有情物(人)は7つであるが、その7つは一般的な人々ではなく、すべて特定の個人である。

次に、テアリ文にはこれらの「テアリ+意志、使役の助動詞」の形がなぜ存在可能なのかを考えてみたい。論者は神永(2006)で平安中期のテアリ文の意味から、テアリはタリのような一語の助動詞ではなく、接続助詞テと存在動詞「あり」を基にした「アリ」から構成されていると目されることを述べた。このアリは存在の本動詞「あり」のように、それ自身で述語となったり、独自の主語や存在場所を示す項をとったりするものではないが、いまだ本動詞としての「あり」の影響を残している。(17)～(20)にみられる「テアリ+意志、使役の助動詞」の形は「テアリ」に直接これらの助動詞が接続したというよりは、テアリのアリに助動詞が接続することにより、「テ+「アリ+助動詞」(＝動詞+助動詞)」という形に近い構造を成すことによって存在しえたものと思える⁵。

3.3 動作客体のテアリ文のまとめ

限界性を有する他動詞にあたる動詞類型図に属する他動詞が上接するテアリ文のうち

には、再帰的用法の動詞が上接したテアリ文のように動作主体のテアリ文となるもの（類型⑤の下位分類③に属する動詞）もあるが、他は全て動作客体のテアリ文を構成している。動作客体のテアリ文は、テアリに意志、使役の助動詞が接続せず、動作主が後退、背景化した（客観的な）動作結果状態（一を～してある）を表すものと、テアリに意志、使役の助動詞が接続して、動作結果の意志的維持（一を～しておく）を表すものとの2つの異なる意味をもつものに分けられる。この2つの意味内部における動作主体（＝動作主）というものを考えてみると、動作の意志的維持の場合は動作主体の意志的なものが表に出ている分、動作主体というものをある程度重視した文といえるだろうし、一方の動作結果を表す場合は、動作主が後退、背景化しているので、動作主体をそれほど重視しない文といえるだろう。また動作客体自体についてみると、（客観的）動作結果を表す場合には客体は非情物がほとんどであるが、意志的維持の場合には、客体は特定の人物が多いというような特徴がみられる。

4. 動作客体の格表示

動作客体のテアリ文の客体は、行為の対象にあたるので、格助詞を取るとすれば対格「ヲ」であるが、実際にヲ格を表示している例は、28例中例文（18）の「何ごとをか見捨てて・・」（20）の「宮仕へ人をかたがたに・・」と次の例文の3例だけである。

(21) かつは、この人をいかにもてなしてあらせむとすらん、ただ今、・・
(源 東屋)

動作客体を「は」で主題化している例が（14）の「かの御手なるはことに・・」と次の例文にみられる。

(22) ひとり隠れゐるばかりの屏風、几帳、着るものばかりは、さはいへど、広かりしところの名残に、なくなりぬと見れど、なほしつらひてあり。(う 俊蔭)

これらの「は」の置き換えは、現代語では「ガ」が期待されるところであるが、当時動作客体が主格「ガ」をとった用例は見当たらないので、結局これらの「～は」は「～が」を主題化したものとみなすことができない。

5. まとめ

平安中期のアスペクト表現形式テアリは、上接する動詞によって表現内容が2つに分かれる。1つは動作自動詞（動詞類型Ⅰ）、動作主体の動作による変化自動詞（同Ⅱ）、変化主体の状態変化による変化自動詞（類型Ⅲ）、限界性のない他動詞（同Ⅳ）、限界性

を有するが再帰的な用法の他動詞（同⑤の③）が上接するものであり、「動作・変化主体について述べている」ものである。他の1つは限界性のある他動詞で変化や生産・出現を意味するもの（同⑤の①②）が上接するものであり、「動作客体について述べている」ものである⁶。「動作・変化主体のテアリ文」は149例（84.2%）であり、「動作客体のテアリ文」は28例（15.8%）である。平安中期のテアル文においては、前者の方が後者よりもはるかに多いことが分かる⁷。また後者の文で動作客体にヲ格が表記されているものは少数である。

本論のメインテーマである他動詞構文に限ってみれば、

- (1) 限界性のない他動詞（類型④）と限界性のある他動詞のうち再帰的用法のもの（同⑤の③）が上接するテアリによる「動作主体のテアリ文」
- (2) 限界性を有する他動詞で動作客体の変化や、生産・出現を意味する動詞（類型⑤の①②）が上接するテアリによる「動作客体のテアリ文」

の2つがあるが、「動作客体のテアリ文」はさらに、

- ◇ 動作主体が後退・背景化し、動作主体を重視せず、単に（非情物等の）動作客体の結果の状態（一を～してある）を（客観的に）述べているもの
- ◇ テアリに意志や使役の意味の助動詞が接続する、動作主体を重視した動作客体の結果の意志的維持（一を～しておく）を意味するもの

との2つに分けられる。◇は16例であり、◇は12例で、前者の方が後者よりやや多い。

最後に、本稿のテアリ文類型の動詞別の用例数を表にして示す。カッコ内は全用例数177に対する比率を表す。限界性の有無は、自動詞の場合テアリ文の類型分類に特に関係はしないが、一応記しておいた。

文類型	自他	限界性	動詞の意味	用例数
①	自	無	主体動作	38 (21.5%)
②	自	有	主体動作 主体変化	21 (11.9%)
③	自	有	主体変化	51 (28.8%)
④	他	無	主体動作 客体不変化	32 (18.1%)
⑤の①	他	有	主体動作 客体変化（位置変化、状態変化）	19 (10.7%)
⑤の②	他	有	主体動作 客体変化（生産、出現の状況変化）	9 (5.1%)
⑤の③	他	有	主体動作 客体不変化（再帰的用法）	7 (3.9%)

本稿では、主として動作客体のテアリについて平安中期の仮名散文を資料として考察してきたが、日本語の「テ+存在動詞」を基とする動作客体についてのアスペクト表現形式の歴史の変遷をみていくには、テアリ（ル）ばかりでなくタリやテイルなども含めて総合的に考察する必要があり⁸、このことも今後の課題である。

注

- 1 本稿で扱わなかった動詞十(補)助動詞は次のものである。「睦びきこゆ」「語らひきこゆ」(2例)「寤えたてまつる」「頼みたてまつる」「見なしたてまつる」「離れたてまつりたまふ」「言はる」「養はる」「賜はる」「思ひ挑まれる」「悪しうせらる」「打ち填めらる」「なます」「思はず」「知らず」「あき満たす」「ふところ住みせさす」「屈せさす」
- 2 用法的にはタリもテアリ同様動作・変化の結果状態を表す。但し、タリには動作結果の意志的維持や進行の読みがなく、テアリには完成(～シタ)の用法がない、などの違いがある。タリとテアリの用法や意味の異なりについては神永(2007)で述べているので、そちらを見ていただきたい。なお、この件に関しては注8も参照していただきたい。
- 3 本論は他動詞がメインテーマであるので、例文も含めて自動詞については簡単に触れる。
- 4 「むかへ火つくる」は「腹を立てる」の意である。
- 5 このように結論づけられるのは次の2つの理由からである。
 - ① テアリが一語の助動詞であれば助動詞「す」は接続できない。
 - ② テアリが一語のアスペクト助動詞であれば、タリのように下接する助動詞「む」は推量の意味となる(「限界性他動詞十たらむ」については次の注8で述べている)。
- 6 金水(1995)では宇和島方言のアスペクト補助動詞シトルを例にとり、結果状態の所屬が主語に限定されない(目的語にもあり得る)意味を有するアスペクト形式を「意味的アスペクト体系」と呼び、これに対して従来のテイルに代表される結果状態の所屬が主語に限定されるアスペクト形式を「統語的アスペクト体系」と呼んだ。この呼称を用いるならば、平安中期のテアリもタリも意味的アスペクト体系に属するものといえる。
- 7 論者の調査によれば、現代日本語で「動作・変化主体のテアル文」を構成する自動詞が上接するものは、テアリ用例の2%弱である。
- 8 同じアスペクト表示の機能をもつ助動詞タリにも動作・変化主体について述べているもの、つまり「動作・変化主体のタリ」は勿論、動作客体について述べている用法、つまり「動作客体のタリ」がある。例文を示す(例文(i)～(vi)は全て源氏物語・夕顔から)。

(i) 人は少なくて、さぶらうかぎりはみな寝たり。

(ii) むすめなど渡り集ひたるほどに

(iii) 木立いと疎ましくもの古りたり

(iv) 「憎しとこそ思ひたるな」

(v) 御車入るべき門は鎖したりければ、人をして惟光召させて、待たせたまひけるほどに、

(vi) ほのぼのと物見ゆるほどに下りたまひぬめり。かりそめなれどもきよげにしつらひたり。

(i)～(vi)に上接する動詞は順に本稿の動詞類型 ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ に属するものであり、動作・変化主体のタリ文である。(v) (vi)は動作客体のタリ文である。(v)は2で示した動詞分類で類型㊸の①にあたる非情物の動作客体(門)が変化を被るものである。(vi)は同じ類型の②にあたる非情物の動作客体(御座所)を生産・出現するものである。両例とも同種の動詞を上接するテアリ同様動作客体の結果状態について述べており、動作主体は背景化されている。タリがテアリと異なる点は、タリには3.2.2でのべた動作結果の意志的維持の用法がないことである。テアリに接続する意志「む」と使役「す」の助動詞のうち、「す」は助動詞タリには接続できない。残るは「む」であるが、動作客体のタリに下接する「む」はすべて「推量」の「む」であり意志を示すものではない。以下に例文を1つ示す

(vii) これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいとみぐるし。(枕 78段)

この例文中の「たどたどしき真名書きたらむ」は「おぼつかない漢字でかいている(ような)もの」の意味である。タリとテアリが異なる他の一点は、タリには(v)や(vi)のタイプでも主語(=動作主体)が明記されている構文があることである。例を1つ示す。

(viii) 戸口近き人々、色々の袖口して、御簾引き上げたるに、権大納言の、御香取りてはかせたてまつりたまふ。(枕 124段)

(viii) では「御簾を引き上げる」という動作の主体として「戸口近き人々(=女房たち)」が明記されている。この種のタリは動作客体((viii)では御簾)の結果状態を表しているのではなく、「・・がーを〜した」という出来事の完成(〜シタ)を表しているものと思える。

<参考文献>

- 神永正史 2001 「ノデ、カラ節のル形とタ形について」『日本語と日本文学』筑波大学国語国文学会 32号
——— 2006 「平安中期のテアリ —タリとの比較から—」『筑波日本語研究』筑波大学日本語研究室 第11号
——— 2007 「動詞の類型とテアリ文の意味」『筑波日本語研究』筑波大学日本語研究室 12号
上藤真由美 1995 「アスペクト・テンス体系とテキスト —現代日本語の時間の表現—」ひつじ書房
金水 敏 1995 「いわゆる進行態について」『築島裕博士古希記念国語論文集』汲古書店
——— 2006 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
此島正年 1973 『国語助動詞の研究』桜楓社
鈴木 泰 1996 「メノマエ性と視点(Ⅲ) —古代日本語の通達動詞の evidentiality (証拠性) —」『日本語の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集』ひつじ書房
——— 1999 「改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト —源氏物語の分析—」ひつじ書房
福沢将樹 1997 「タリ・リと動詞のアスペクチュアリテイ」『国語学』191集
益岡隆志 1987 「命題の文法」くろしお出版
柳田征司 1987 「近代語「テアル」」『愛媛国文と教育』19号
——— 1991 『室町時代語資料による基本語彙史の研究』武蔵野書院
山口堯二 2003 『助動詞史を探る』和泉書院
山下和弘 1989 「「タリ」と「テアリ」」『語学研究』66・67号 九州大学国語国文学会
——— 1996 「中世以後のテイルとテアル」『国語国文』74号
湯澤幸吉郎 1970 『室町時代言語の研究』風間書房
Ritter, Elizabeth and SaraThomas Rosen 1998 Delimiting Events in Syntax. In M. Butt and W. Gerder (eds) *The Projection of Arguments*. CSLI Publications.
Tenny, C. 1994 *Aspectual role and the syntax-semantics interface*. Dordrecht:Kluwer

<引用文献> (下線は用例で用いた名称)

- 『新編日本古典文学全集 源氏物語』(1996 阿部秋生他3名訳・注 小学館 底本伝定家筆本、伝明融筆 臨模本、大島本、青表紙諸本)
『新編日本古典文学全集 枕草子』(1997 松尾聡他1名訳・注 小学館 底本陽明文庫蔵本、弥富本)
『新編日本古典文学全集 栄花物語』(1995 山中裕他3名校注・訳 小学館 底本梅沢本)

『新編日本古典文学全集 うつほ物語』(1999 中野幸一校注・訳 小学館 底本尊経閣文庫蔵前田家本)
『新編日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語』(三谷栄一他1名校注・訳 小学館 底本安田文庫本)

付記

本稿は筑波大学国語国文学会第31回(2007年9月22日於筑波大学)における口頭発表をもとに加筆・修正を施したものである。ご指導いただいた諸先生方に感謝申し上げます。

(かみなが せいし 筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究科 日本語学)